

テに カル の白 余

世界にも例のないスピードで超高齢社会を迎えた日本。これに伴い医療現場では、高齢者を専門に看護する人材が欠かせなくなっている。神戸海星病院（神戸市灘区）の西山みどり看護師長（44）は、国内に約40人しかいない日本看護協会認定の「老人看護専門看護師」だ。患者が安らかに老い、尊厳ある最期を迎えられるよう心を砕いている。

老年看護に関心

「老人看護専門看護師となったのは、病棟で数多くの老若男女の患者と接してきた経験が背景にある」

最初に勤務した病院では、などが急慢性期の患者を受け持ち、「治す」ことだけを考えていました。でも、海星病院では必ずしも「治す」ことだけが目標ではなく、家族の介護を受けられなかったり、身寄りがなかったりする

人生の最終章 安らかに

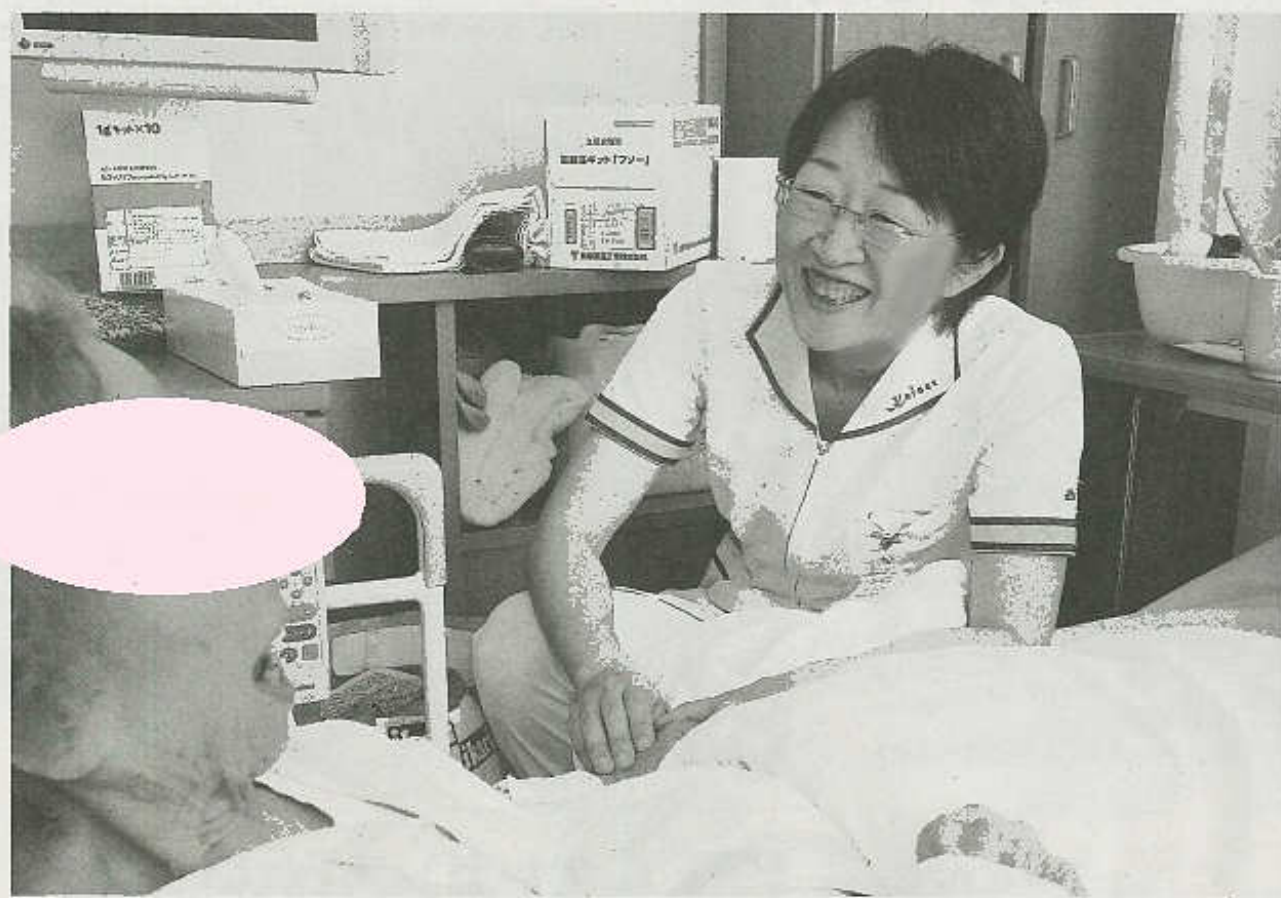
西山みどり 神戸海星病院看護部長 田

お年寄りの患者さんがいます。うになっていきました。た。

充実した形で

どんな人も年齢とともに体の機能は衰え、終わりを迎えることは避けられません。では、より良い最期を迎えるために何か出来ることはないか。老年看護に関心を持つよ

「しかし、老年看護とは何か、分からなかった。自問自答が続いた」
専門看護師を目指して入学した兵庫県立大大学院では、



「99%無理だが、1%の可能性で成功する治療法があればどうするか」といったテーマで討論する機会がありました。

小児看護専攻の方は、「少しでも望みがあれば、そちらを取る」と。私は、残された時間の少ない患者さんには、望みの薄い治療より、充実した形で最期を迎えてもらう方が大切だと考えました。

どちらかが正しいという話ではありませんが、私にとって、子どもや成人の看護とは異なる、より死を意識した老年看護の特性を、見つめ直すきっかけになりました。

1968年生まれ、兵庫県出身。91年から兵庫県立尼崎病院で勤務。97年、佛教大の通信教育課程を卒業。98年から神戸海星病院で勤務し、退職後、2003年に県立大大学院看護学研究科を卒業。04年に同病院に復職し、看護師長を務める。05年に老人看護専門看護師の認定を受ける。

「体調はどうですか」などと、入院患者に話しかける西山みどりさん（神戸海星病院で）＝栞田直也撮影

別の視点で治療

「お年寄りとして接して、治療方法も一緒ではないと分かってきた」

胆のうがんがリンパ節に転移し、「足が重い、だるい」といつも苦しそうな80歳代の女性がいきました。

足をさすったり、お風呂に入れたりしても効果がありません。でも、リハビリ用のエアマッサージ機で症状が和らいだのです。いつも眉間にしわを寄せていた女性が、穏やかな表情で寝入っていました。

亡くなったのはその一週間後でしたが、「歩けるように」というリハビリ本来の目的ではなくても、症状を緩和するという別の視点に立てば、やれることはたくさんあるのだと実感しました。

要望聞き入れる

「病院のスタッフとともに看護に取り組み、時には一歩引いて助言もする立場だ」

患者さんが食べ物をのみこむことができなくなれば、現場のスタッフはほとんどの場合、胃に直接栄養を送る「胃ろう」などの手段を考えます。生命維持に必要で、状態を少しでも良くしようと考えれ

ば、当然です。しかし、「患者さんにはおいしいものを食べる楽しみも要る」という視点に立てば、どうでしょうか。その処置が患者さんの生活にどんな利益と不利益をもたらすのか。患者や家族から要望をきちんと聞き入れなくては いけません。

家族で話し合おう

「患者だけでなく、家族のケアも必要だと考えている」
認知症の妻を10年近く看病した、70歳代の男性の話です。入退院を繰り返した妻について、「穏やかに逝ってくれたらと、そればかり考えます」
「覚悟はできています」と話していました。

でも、いざ奥さんが危うくなった時、ご主人は「明日から何を支えに生きていけばいいのかわからなくなりそうです。この喪失感にどう寄り添えばいいのかわからず、言葉が見つかりませんでした」

「死」を考えることは家庭内ではタブー視されがちです。しかし、どんな最期を迎えたいのかを話し合うことは大切です。「家族で話し合いたか」と、患者や家族に近い立場で、問いかけるようにしています。

（聞き手 富山優介）

くらし健康・医療

「くらし健康・医療」は日曜日に掲載します